

連続対話シリーズ『地球の文学』 東南アジアのことばが奏でる詩—— タイとベトナムの表現世界

野平宗弘

コースイット・テ IPP ティエンポン

本講演は、連続対話シリーズ「地球の文学」の一環として、「東南アジアのことばが奏でる詩——タイとベトナムの表現世界」をテーマに実施されたものである。当日は、両地域の詩についての対話が行われ、会場に約20名の参加者が集まった。参加者は、タイ語専攻・ベトナム語専攻を中心に、他専攻の学生や研究生も含まれ、多様な背景を持つ聴衆が集う場となった。

発表概要

【ベトナムの詩について】

東南アジア地域の中で、ベトナムは特に、歴史的に中国文化の影響を強く受けてきた。ベトナム語による口承文学の伝統は古来より現在に至るまで続いてきたが、それと並行して、知識人には漢籍や漢詩の素養が求められた。講演では、その一例としてベトナム李朝期（1010-1225）にいたとされる禅僧の空路の作と伝えられる七言絶句の偈を紹介した。この詩には中国唐代の薬山禅師を謳った李翱の詩の影響が色濃く見られる。また、ホーチミンの『獄中日記』（1942-43年）が漢詩であるように漢文の権威は近代に至っても続いていたことが分かる。

庶民の言語であったベトナム語を記すのに用いられたのが、漢字を借用したり組み合わせたりして作った字喃（チュノム）文字であり、ベトナム語、字喃を用いての創作での最高傑作と言われているのが、阮攸（1765-1820）の『翹伝』である。この作品は明末清初に書かれた青心才人作の白話小説『金雲翹伝』を元にした作品である。『翹伝』では、一語＝一音節のベトナム語の六語と八語の段が交互に続いていく六八体という定型韻文詩の形で3254段に渡って、翹（キエウ、ぎょう）という女性の悲劇が語られている。六語の段の末尾と続く八語の段の六語目、そして八語の段の八語目と続く六語の段の六語目が押韻する。ベトナム語には六つの声調があり詩歌では平仄法もある。平らな声調となだらかに下降する声調が平声で、残りの四つの声調が仄声である。六八体では、二、六、八語目が平声で、四語目が仄声となる決まりである。



近代以降、ベトナム語の記述は、ローマ字を元にしたクオックグー文字にとってかわり現在に至っている。フランスの植民地支配下で形成されたベトナム近代文学はクオックグーを用いて創作された。1930年代初頭には「新しい詩」運動という近代詩への詩歌改革運動が興っている。その代表的なものとしてハン・マック・トゥーの個人の失恋の思いを綴った詩と、ランボーとベルレーヌの友情を讃えたスアン・ジエウの詩を紹介した。ベトナム戦争期の詩人としてはファム・コン・ティエンを紹介した。彼にはランボーからの影響があると同時に、前に挙げた空路の詩を自らの思想の中に取り込んでいるなど、洋の東西の混淆が見出せる。もう一人、南部を代表する現代詩人ブイ・ザン（1926-1998）も取り上げた。彼はボロを身にまとい、白髪のリボンで髪を束ね、ヒゲも伸び、浮浪者のような姿で、狂人あつかいもされていたが、彼の詩は評価が高く、ベトナムの人々から愛されていた詩人であったことを紹介した。（野平）

【タイの詩について】

タイの詩は、声とリズムを基盤に発展してきた点が強調された。韻律と音の響きを重んじる伝統を持ち、声の芸術として受け継がれてきたこと、さらに古典文学の多くが韻文で書かれていることに加え、現代に至るまで詩が教育・芸能・日常表現の中で広く用いられている状況が示された。また、タイでの文学賞である S.E.A. Write Award（東南アジア文学賞）では、詩集部門に3年ごとに選考対象となっている点にも言及があった。

タイ語の押韻は、同一の母音を持つ語を用いること、また音節末に子音がある場合には同一の末子音をそろえることを基本とする。一方、声調の一致は必須条件とはされていない。こうした韻を尊ぶ感覚は詩に限らず日常生活にも広く見られ、道路名の命名やスローガンの作成などを通じて、言語文化の中に自然に浸透している。

タイの詩の基本的な特徴に関しては、韻を踏むことが重要な要素であり、一定の韻律に基づいて構成される点が示された。『プラ・アパイマニー』『ラーマキエン』『クン・チャン・クン・ペーン』などの古典作品の多くが韻文で書かれ、旋律に乗せて朗読される伝統とともに継承されてきた。また、現代タイで広く用いられている詩形である八音節詩（クローン・ペット）にも触れ、その構造が説明された後、伝統的な朗読の実演が行われ、音声の詩の特徴が提示された。

本講演は、タイの詩を「読む文学」にとどまらず、「声として響く文学」という観点から捉える視点を提示するものであった。詩が文化的記憶や感情表現と密接に関わっていることが示され、タイおよび東南アジア文学研究において、音声・韻律を含めた総合的理解の重要性が改めて確認された。（コースィット）

連続対話シリーズ『地球の文学』
東南アジアのことばが奏でる詩——タイとベトナムの表現世界

日程 11月13日(木)、16:00-17:30
場所 東京外国語大学総合文化研究所会議室

連続対話シリーズ『地球の文学』

主催：東京外国語大学総合文化研究所

東南アジアのことば が奏でる詩

タイとベトナムの表現世界

11月13日(木)

東京外国語大学
総合文化研究所会議室
(研究講義棟 422 教室)

16:00 ~ 17:30 (5限)

登壇者 コースィット・テイツプティエンボン
野平宗弘

使用言語：日本語

参加費無料、予約不要

言葉は音として生まれ、音は人の心を揺り動かす。
その魅力は、古来より人々の精神を潤してきました。
東南アジアでは声とリズムの中に感情や知恵、美意識を
託してきた詩の伝統が息づいています。

本対話では、ベトナムとタイの詩に焦点を当て、
古典詩から現代詩までを辿りながら、「音」がどのように意味を
紡ぎ、社会や時代の変化を映し出してきたのかを考えます。

旋律のように響くことばの美しさ、
そしてその奥に潜む文化的文脈と表現の豊かさを、
両地域の詩人たちのことばを通して味わう時間となるでしょう。